IF

麒麟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
IF

【Nコード】
N2865K

【作者名】
麒麟

【あらすじ】
黒崎一家と織姫・石田・茶度と更に浦原商店の人達が尸魂界で生活している?!………そんな日常のお話になります。CPとしては一織・恋ルキ・日夏となっております。（他の現世キャラもちょろっと出たりします）

その１（前書き）

つまり、黒崎一家と織姫・・石田・茶度と更に浦原商店の人達が尸魂界にいる、とゆーわけです
設定はちょこちょこと違ってたりします

日常のお話になります

ＣＰ
一織・恋ルキ・日夏
が基本です

その1

瀞霊挺の、ある地区の外れに、その家はあった。他に比べるとこじんまりとした屋敷。そこには家族六人が暮らしていた。だが、今まさにそこから旅立とうとしている若者が一人。この物語の前半での主人公にあたる。若者の名は、黒崎一護。

「じゃ、行ってくる」

霊術院の制服を身に纏っている。今日からそこへ死神になるために通う。

「存分に暴れてこい」
「喧嘩はあまりしちゃ駄目よ」

父の一心は瀞霊挺で浦原と共営で売り物をしている。かなりの大手で、上流貴族に沢山お得意様を抱えている。仕事とプライベートの態度が百八十度違うのは、ご愛敬だ。
母の真咲はそんな一心を支え、家事を切り盛りしている。穏やかな外見とは裏腹に、逞しい母親である。

「遊子、夏梨。んな顔すんなよ。長い休みん時は帰ってくっからよ」

まだまだ幼い双子の姉妹。しかし双子といえど二卵性だから外見は似ていない。にも関わらずやはり双子。兄がいなくなってしまうのが寂しいのだろう、悲しそうだ。

「「いってらっしゃぁい………」」
「おう!」

左右同時に頭を撫で回し、腰をあげる。そろそろ行かないと時間がない。

「行ってきます！」

南流魂街三番地区・阿達（あだち）

「それじゃあお兄ちゃん、たつきちゃん。行ってくるね」

「気を付けてな」

「頑張っておいで」

ここにも一人、霊術院の女性用の制服を着た若者が一人。井上織姫という。

彼女はすでに、死神の力ではない、別の力に目覚めていた。しかし、今年度からそんな者たちを集めて共に死神として共存する運びとなったのだ。

「行ってきまーす！」

ざわめく掲示板の前、一護は張り出された自分の名前が書いてある組を見て、より一層気を引き締めた。

「一組か…………」

特進クラスである。

「よう！」

初日は初っぱなから授業があったものの午前には終了し、昼食を過ぎれば夕飯まで自由時間となった。一護は特にすることもないのでどっかで昼寝でもするかと立ち上がろうとした時、近づいてきた者がいた。

「オメーその髪、地毛か？」
「お前もか？」

真っ赤な髪をした男は人懐っこい笑い方だった。

「まぁな。オレは阿散井恋次。んでコイツは………」

少し気が弱いのか、おっかなびっくり恋次の後ろに隠れていた青年が出てきた。

「吉良イヅルです。よろしく」
「俺は黒崎一護！よろしくな」
「苺………？」
「発音が違ぇ！一等賞の一に守護神の護だ！！お前の方が苺頭だろっ」
「あんだとテメェ！」

ぎゃいぎゃいと騒ぐ二人の横で吉良は考えていた。

(黒崎って…………いや、まぁ結構ある名字だし)

一人で結論付け、気にしないことにした。それにここに入ったならばそんなものは関係ないのだ。
そんなわけでまだ口争いをしている二人を止めに入っていくのだった。

一方隣のクラスでは
「私、井上織姫っていうの」
「え？……あ、私は、朽木ルキアだ」
「私と朽木さん、寮の同室だよ！よろしくね」
「よ、よろしく」
養女とはいえ、四大貴族の一つ、朽木家の人間であるルキアは、そんなことに臆することなく話しかけてくれた織姫に好感を持った。
「お昼、食べに行こう！」
「ああ！」

「助かったよ………ありがとう」
「…………ム」

口喧嘩は吉良では止めることが出来なかった。変わりに止めたのは二m近くある大男。一護と恋次の襟首を掴み軽々と持ち上げて引き離したのだ。
「オメーでけぇなぁ」
「名前、何ていうんだ？」
先ほどのいさかいなどなんのその。良くも悪くも同類なのだ。その変わり身の早さに呆気にとられる吉良の横で大男は呟いた。

「茶度…………泰虎」

その2

入学してから二週間経ち、授業にやっと慣れ始めた頃。一護は恋次と茶度、吉良と共に廊下で喋っていた。

「幼なじみ？」
「おぅ！ガキん時に会ってな、それからずっと一緒だった」
「……『だった』？」
「赤ん坊の頃、生き別れになってた姉貴が貴族――朽木家に輿入りしてな。養女として迎えられたんだ」
「へぇ～……」
「お、あれだ」

恋次が示した廊下の先に視線を移す。やってきたのは明るい栗色の髪をした女子と、その肩ぐらいまでしかない黒髪の少女。一護はつかの間、栗色の方に目を奪われた。だがすぐに我に帰り、不思議に思ったものの気にしないことにした。

「ルキア！」
「恋次！」

恋次の呼び声に反応を示したのは黒髪の少女。パタパタと駆け足で近づいてきた。この少女が朽木家の養女になった幼なじみなのだろう。

「オメー友達が出来たのか」
「むっ！馬鹿にするな」
「まぁ、コイツが一応幼なじみの」
「朽木ルキアだ。よろしく。……井上！どうした？」

井上と呼ばれた栗色の少女はぽやぁ、と頬を赤らめて立ち止まっていたがルキアに呼ばれてようやく近づいてきた。

「はじめまして！井上織姫っていいます」
「前に話しただろう？この赤髪の男が私の幼なじみ、阿散井恋次だ」
「よろしくね！他の皆の名前も教えて？」

ニコニコと人好きする笑顔を振りまく織姫は黙って見ていた一護・吉良・茶度に話しかけた。各々名前を告げるが、やはり一護の段階で『苺』と間違えられ、しかし女子に強く言えるわけもなく、さらにここずっと同じクラスの仲間達へ散々訂正してきているのもあって弱々しくまた訂正するのだった。

だが、

「カッコいい名前だね！綺麗な髪もしてるし」

唯一こう言ってくれた織姫に元気をもらった。

それから後、一護と同じクラスの雛森桃とも親しくなり、昼休みや土日はよく七人でつるんだ。
吉良が雛森を前にすると挙動不審になるので一護と恋次で問い詰めたところ、一目惚れしたとのことで声援を送ったり呆れたり哀れんだり。なにせ挙動不審が半端なくひどいのだ。それに対象の雛森や、ルキアと織姫まで気づかないのだ。これに呆れないわけがない。
……と、まぁこんなそんなで一月ほどの夏の長期休みがやってきた。この間は実家があるものは帰ってよし。あってもなくても帰りたくなければ留まるのもよし。七人の中では恋次と茶度以外は帰省することになった。

「あんなアブネーとこ戻るよか、働いてちっとでも稼がねーとな」
「………ム」

恋次は犬吊、茶度は北流魂街七十六番地区・紺兎（こんう）。どちらも危険区域だ。

「雛森さんとあたしは途中まで一緒だね」
「道中よろしくね、井上さん！」
「一護も瀞霊挺出身なのか」
「ん、まぁな」
「まっともあれ九月まで元気でな！」

恋次と茶度は二方に別れた仲間に手を振った。

ザワザワ………

死神の生活必需品がそろっている商店街前。そこで一護はルキア・吉良と別れた。商店の人間はほとんどが老舗で、一護とは顔馴染みで声をかけてくれる。一心の仕事仲間でもある彼らは、ただ大店（おおだな）の息子だからといって声をかけるのではなく、やはり一護の人柄を見ての結果である。

さてさて

「おや、一護サンじゃないっスか」
「浦原さん、来てたんですか」
一心と共に共営しながらも技術開発局の局長をも務める浦原は、滅多に店で姿を見かけることはない。
「あぁ、ナルホド………もう夏期休暇の時期っスか」
「また忙しくなるな」
「そぅっスねぇ〜。短期従業員を雇わないと間に合わないかもっスね………」
意味ありげに浦原が扇子で目から下を隠して一護を見る。
「………なんだよ？」
「いやぁ？ただ――一護サンのことですから、お家のことはお友達に言ってないんじゃないかな、と」
誰とでもすぐ気が合ってしまう一護である。危険地区からきた者と仲がよくなってもおかしくはない。
「聞かれてねぇし」
「別に責めてるわけじゃなくて」
「わかってるよ。心配してくれてんだろ？大丈夫、いつかはちゃんと言うさ」
「ならいいんスけど………そうそう、妹サン達がお待ちかねなんじゃないっスか？」
「ん？ああ、親父も家にいるみてぇだしな」
「では、また」
「あぁ、また」

商店街を抜ければすぐ、また人気は無くなる。しかしここまで来てしまえばすぐだ。家の前に立っている人影が誰だかわかるほどに、近い。

「一兄〜っ！」
「おにーちゃ〜んっ！」

小さな体で大きな声を出して大きく手を振る。その二人の後ろでは両親が笑いながら待っている。

そして思い知る

幸福だ、と

そして願わくは仲間達もこうして出迎えられていてほしい
いつか、恋次と茶度にも

その3

その夜、縁側で一護は一心と酒を酌み交わしていた。瀞霊廷では特に飲酒の制限が決まっていない。自己管理である。というわけなので黒崎家では幼い頃から酒に馴らされており、さらに体質的にもめっぽう強かった。

「院はどうだ？」
「いい奴らばっかりだ。楽しいぜ」
「ふーん……で？」

意味をはかりかねて、一護は父を見た。真っ直ぐ向いたまま息子の方を向かない。

「――別に隠してるわけじゃねぇよ。聞かれてねぇだけだ。それに必要とも思えねぇし、家柄なんて関係ないだろ」
「まあなぁ。死神は実力主義だ。関係ないっちゃ関係ねぇな」
「別に誇りを忘れたわけじゃねぇ」
「当りめーだよバカヤロウ……よくやってんならいいさ」

一心と一護はそれきり黙ってかさが減っては盃に酒を注ぎ足すのだった。

「ねぇ、一兄」
「なんだ？」

長期の休みだ。やったことを忘れないようにと宿題が大量に出るのは当然である。しかも毎日コツコツと片していかなければ、絶対に最後の三日で終わるような量ではない。
しかしこう見えて一護は真面目だ。真面目なのだがズボラでもある。だから面倒なことはさっさと終わらせてしまおうと、朝から机に向かって黙々とやっつけていた。
そんな兄の近くには妹の片割れ、夏梨が静かに本を読んでいた。遊子は兄が帰ってきて浮かれすぎたため、知恵熱を出して別室で布団の中だ。午後には復活するだろう。
で、その夏梨が一護に話しかけてきた。

「れいじゅついんって、たのしい？」
「まぁ授業は難しいこともあっけど、楽しいぜ」

一護は体を動かすのは好きなので、まだ座学が多い授業は退屈だ。

「ふぅん………ありがと。ジャマしてごめんね」

「いや………」

夏梨は一護と同じくらい霊圧が高い。興味を持つのも不思議ではない。遊子よりも冷静で好奇心も高い夏梨のことだ。遠からず自分も入りたいとかいいだすだろう。きっとそんな夏梨を見た遊子も。

だが院に入ってますます、死神は危険な仕事とわかった。だからこそ、

「…………」

口を一旦開いて、黙った。そして目の前の敵をまた片付け始めた。

夏梨の人生だ

俺の決めることじゃねぇな

「織姫、院はどうよ？」
「すごく楽しぃよ！………たつきちゃんも来ればよかったのに」
織姫は隣に住む幼なじみの竜貴と近くの川へと魚釣りに来ていた。食料を得るためだ。

「あたし、ああいう堅っ苦しいのはちょっとねぇ。霊力があるったってほんのちょっとだし――――で、だ」
「うん？」
「さっきの『楽しい』発言の時に赤くなってたけど、いい男でもいた？」
「えぇーっ！？／／／」

ニヤリと笑う竜貴は内心苦笑した。

（ホント、素直っていうか正直………わかりやす）

ワタワタと織姫が慌てるので竿があっちこっち移動して水しぶきがあがる。

「織姫落ち着きなって。魚が逃げるよ」
「うぅ………／／／」

逃げたら大変だ。意外と織姫はよく食べる。

「で、どうなの？」
「カッコいいなぁって思ってる……の／／／」
「へぇ～！どんな奴？」
「あのねっ髪が綺麗なオレンジ色なの。地毛なんだって」
「オレンジぃ？！」
「へ？赤い髪の人もいるよ？」
「………わかった。続けて」
「ちょっとぶっきらぼうなんだけど不器用さんなだけでね、優しいんだよ。誰とでもすぐ仲良くなれちゃうの。お話上手ってわけじゃないんだけど、とっても聞き上手だからかなぁ。いっつも眉間に皺が寄ってるんだけど、笑顔がね、可愛いんだ」
「ふぅ～ん……」

最後の『可愛い』発言は男にとってはあまり歓迎できないものだろう。

（しっかしあの織姫がねぇ）

三番地区一番の美女として、地区の若い男たちはほとんどが織姫に憧れ、時には告白や求婚まがいのことを言ってきたりしていた。にも関わらず織姫は一切、ちっともそんなことに気づかなかった。兄や竜貴がガードしていたからとはいえど、完全純真無垢というわけではない。それなりの知識もある。なのになぜこんなにも鈍感なのかと心配していたのだが。

「そらさん……大変だろうなぁ」
「なにが？」

聞いた限りでは悪い奴ではなさそうだ、と竜貴は暫く見守ることにした。

こうして一月の休みは終わりを迎え――――

その4

始まる新学期。実技も入るので院生たちは朝からソワソワしている。そんな中で入学時と同様の見送りを受けた一護は一人だけ気分がのらなかった。というのも斬術と体術は得意だ。小さい頃から精神修行ということで一心に鍛えられてきた。ただ問題なのが霊圧操作。霊圧操作にあたるのが鬼道である。これは細かく霊圧を操り、敵に攻撃したり自身・味方の補助するものだ。性格上、あやふやな物の細かいことが苦手であるのと突進してしまうのが原因だろう。と、言い訳をしたところで死神になるならば鬼道は外せない。つまり何だかんだ言ったところで逃げられはしないのだ。

「何二学期初日から辛気くせぇツラしてんだよ」
「ぃてっ」

教室で一人ぼんやりしていたら視界に鮮やかな赤が入り込んで一護の額にデコピンを食らわせた。

「ってぇ～」
「あれか、休み前に溢してたことか？」
「………まぁな」

二学期から実技に入る旨が伝えられたときに、霊圧操作は苦手なんだと仲間たちに思わず言ってしまった。が、まぁすぐにバレるだろうと開き直ったのだが。

「俺もよ、そーいう細けーこと苦手なんだよ。誰しもそんなんあるって」
「見たまんまな」

「てめっ！」

せっかく珍しく慰めてやろうと思ったのによ、と恋次はいじけた。

その姿でようやく苦笑がもれた。

でも、本当は違う

真の理由は、

もっと深い――――

「くぅーろぉーさぁーきぃー………」

「………すんません」

放課後の実習室には教師と一護だけ。つまり居残り。

「全く霊圧は断トツで一番高いというのに、どうしてこう不器用なんだお前は」

「何ででしょうねぇ」

「そりゃコッチの台詞だよ。なんで発動しないんだ!?」

「詠唱は、いいんすよね」

「あとは霊圧操作なんだよなぁ〜………」

ほとほと疲れたという表情で教師はガックリ肩を落とした。一護はその姿に申し訳なく思っている。思っているのだが、いかんせん自分でも原因がわからない。いくら苦手とはいえ克服しようという意思はある。

今現在それは報われていないが。

「なんなんだろーなぁ………」

手のひらをみたからといって原因がわかるわけもなく。

ゴーン

ゴーン――――

「っと、今日はこれでおしまいだ。なんとか自分でも原因を突き止めるようにしろよ」

「ありがとうございました」

教師が扉へと消えていったのを見届けて、一護は床に大の字に転がった。

ダンッ

バキッ

拳を思いっきり床に打ち付けたら思いの外力が入っていて穴が空いてしまった。怒られるだろう、しかも拳から何かが流れているイメージがしている。血だ。ジンジンと痛む。まだ冷静になれそうにない。

どうしても上手くいかないのだ。しかも教師に分からないものが、自分に分かるわけがない。誰か一人でも、上手くいかない院生だっ

ていただろうに…………

どんどん嫌な考えに陥っていく。一護は自分では止められそうにならなかった。誰かに、冷水でもひっかけてもらわない限りは。

「黒崎くん？」
「どわぁっ？！」
「ひゃあ！」

一護は飛び起き目を真ん丸に開いて声がしたほうへ体の向きをかえ、声をかけた者も真ん丸にして一護を見下ろしていた。

「井、上？」
「えぇぇえっとね、ビックリさせちゃってゴメンね？」
「いや…………つーか、どうしてここに？」
「んっとね、阿散井くんが実習室で居残りさせせられてるって言ってたから、どうしたのかなって…………」
「あー…………居残りっつーか、補習っつーか」

どちらも間違ってはいない。

「鬼道がさ、発動しねぇんだよ。なんでかわっかんねぇんだよなぁ」
「そうなんだ…………あっ」
「あ？」
「黒崎くん怪我してるよ！？」
「え？あぁ、これか」

床に穴を開けた拳の傷は、もうすでに血は止まっている。まだ鈍痛はするが。いまさら医務室に行くのも面倒なのだ。

「舐めときゃ治る」
「ダメだよ！大丈夫、すぐに治してあげるから」
「治すったって」
まだ治癒の鬼道は習っていない。そもそもこれは出来る出来ないの両極端になるぐらい繊細なのだ、治癒術というのは。
「『春桜、あやめ』」
いつも付けている花の髪止めから小鳥みたいなのが二羽、飛び出した。
「【双天帰盾】『私は拒絶する』」
二羽は傷の両側にて羽を広げ、オレンジ色の透明な壁で覆った。
「すげ…………」
瞬く間に傷は塞がっていき、数分後には跡形もなくまっさらな肌へと戻っていた。
「それが井上の能力か？」
「うん。【盾瞬六花】っていうの」
二羽の鳥は織姫の髪止めへと戻っていった。
「今の子たちは治癒専門なんだ。あとは防御専門が三人と攻撃専門が一人」
「すげぇな………」
「そそそんなことないよ！黒崎くんの方が、ずっと凄いよ」

霊圧は学年でも一番。これは生まれつきだから仕方ない。だが座学や斬術は違い、努力が必要だ。予習復習をしていることを織姫は知っている。それはたんに一護が試験勉強をあまりしたくないからであるのだ。しかし普通なら何もしないで終わるだろう。そこが一護は違うのだった。

「そっそんなことより！鬼道が発動しないんだっけ？」
「まぁ、な」
「あたしもね、ちょっと苦手なんだ。【盾瞬六花】自体が鬼道系だから発動しにくいみたいで」

攻撃の形は三種類に分けられる。
一つ目は織姫の能力や鬼道のように、力を持つ詠唱で霊力を相手に飛ばす、またはぶつける形。
二つ目は剣に霊力を乗せて切ったり剣圧（物凄い勢いで空気を切って真空を一瞬作り出すこと）を飛ばす形。
三つ目は本当に力のみで殴ったり斬ったりする形。これは死神でも斬魄刀の名を知らぬ平隊士や、名を呼ばなくても斬れる場合もある。
特に一つ目と二つ目は方向性が全く逆である。前者は霊圧の微妙なコントロールが必要になってくる。
しかし、織姫のは若干違ってくるのだが、これはまず鬼道が最初にイメージ（どのように発動するかとか、どんな系列なのかとか）から入ることに起因する。少し前に述べたように、織姫はすでに自身の持つ鬼道系の能力がありイメージがある。使い方も違うからそこへ新たな違ったイメージを浮かべるのは難しいといえるだろう。

「でもね、この間ちょっとコツを教えてもらったから出来るようになってきたよ」
「それ、ちょっと教えてくれないか？」

「まずね、自分の周りを霊圧で包んでるイメージをするの」
「ふんふん」
「そして暗い穴を思い浮かべて、そこへ霊圧を纏った自分が飛び込むの」
「穴か………」
「その穴は自分の霊圧を放出する穴だから、より暗く沈んだ黒がいいよ」
「へぇ~………なるほどなぁ」
「んと、でもこれはあたしも教えてもらったことだから」
「いや、教えてくれてありがとな」
一護が笑うと織姫は真っ赤になった。しかし今は太陽がオレンジ色。つまり夕方。バレることはなかった。

「そんじゃ最後の一回だ」
「じゃあ、あたし出てよっか」
「なんで？ここにいろよ」
「へぁうんっ／／／」
「なんだそりゃ」
クツリと笑って前を向く。真剣だ。織姫も二、三歩後ろに下がる。

ゆら

「!」

これは、マズイ

「ま、待って黒崎く――――」
「破道の四【白雷】！」

その5

「演習場が半壊したんだってよ」
「半壊ぃ？んなバカな」
「なんでも一年が居残りでやっちゃったんだって」
「え～？居残りって、あれって出来ない人が残るんでしょ」
「「あ、アイツだよ！！」」

朝から妙な空気でざわついているのは、昨日一護がやらかしたこと。

演習場の半壊

二人して驚いている間に、つい先までいた教師が飛んで返ってきて、こちらも唖然とした。綺麗に半分無くなっていたら誰しも驚くだろう。
しかしさすがは教師。すぐに我に返った。そして原因であろう、手をかざしたままの一護を問いつめた。正直、一護自身も驚いている。まさか詠唱破棄の上に威力が最弱といっていい四番で、こんな状態になるとは思ってもみなかったのだ。
「霊圧のコントロールが本当にヘタだなお前は！」

と、罵られた。当然だ。一歩間違えれば大惨事だったのだから。

「演習場の破壊なんて、馬鹿なのか末恐ろしいのかだな」
「破壊じゃねぇよっ半壊だ！」

「壊したのに変わりはねーだろが！」
「怪我がなくて……よかったじゃないか」
「そうだよ！霊圧のコントロールは仕方ないさ、僕らはまだ一年なんだから。阿散井君だって、苦手じゃないか」
「けっ」

一護と恋次の引き離しが完了したところで担任が入ってきて、一日がまた始まる。

一日中好奇の目線にさらされて辟易していたところに、さらに視線が痛くなりそうなことが待ち受けていた。

それは全授業後のこと。

「黒崎はこの後理事長室に行け。他は解散だ。以上！」

不審げにざわめくクラスメイトの視線は当然、一護に集中した。

「理事長ってさぁ………」

ボソボソと女子生徒が友人達とささやく。
無理もない。理事長はこの霊術院の創立者・山本源柳斉重國。彼は老齢でありながら一番隊隊長で、隊長各のトップ。つまり死神の頂点。だからこそ、院生が見ることが出来るのは入院式と卒院式のみ。それも遠くから。彼の圧倒的な霊圧に気を失ってしまうからだ。
その、理事長からの呼び出し。

(退学っつーのは流石に無ぇーだろうけど………やっぱ怒られはすっだろな;)

故意ではないにしろ、修理代だとて馬鹿にはならないのだ。

「っとと………」

危うく行きすぎるところだった。
その扉は他の扉より重厚でいかにも偉いさんがいるような作りだ。

(ま、実際偉いんだけどよ)

一護はそんな扉に二回、ノックをした。

「黒崎一護です」

『入れ』
「失礼します」

躊躇いもなく開く。広い部屋だった。だが重厚な机と、源柳斉が座っているこれまたな椅子意外、物がない。のは当たり前で、普段は死神の総隊長として君臨しているのだからこちらばかり付きっきりというわけにはいかない。

「…………えーっと」
「ほほぅ」

長い顎髭をゆったりとした動作で撫で付けながら一護を出迎えた。

「お主、黒崎家の嫡男坊か」
「！！」
「その膨大な霊圧や質、父によく似ておる」

線の目が開かれる。

その日遅く、一護は寮に帰った。

「一護」
「んぁ？」
「昨日何があったんだ？」
「怒られただけだ」
「馬鹿にすんなよ」

真剣な顔で恋次が怒るものだから、一護は口をつぐむしかない。

「たかが演習場がぶっ壊れただけで理事長が出てくるかよ」

「テメー何隠してんだよ」

一護の瞳が細められた。
「隠してなんかねぇよ。聞かれなかっただけだ」
「そうだな。テメーは聞き上手だからな。そうやって理由を付けて逃げやがる」
「逃げ…………そうかもな。逃げだ」
聞かれなかったのは事実。しかし言われたようにそうやって無意識に逃げていたのだろう。
「俺はな、お前が何者だろうとそれだけで距離をおいたりしねーよ。なめんなバーカ」
「最後の一言は余計だよコノヤロウ」

そして一護から話されたことは少なからず驚かせられた。だからといって対応が変わることは無かった。

その6

二年次に上がる頃には一護の正体を知らぬ者はいなくなった。そして周りの人間の態度が変わった。距離をとる者、軽蔑する者、陰口をたたいたり妬んだりする者。想像していた通りの反応に辟易することもあったが、唯一の救いが恋次達の変わらない態度。少なからず一護の性格を知る者達も動揺があったものの、それだけだった。

「一護、手合わせしようぜ」
「おーいいぜ。今回こそ決着つけようじゃねーか」
「望むところだ！」

最近の趣味は恋次（たまに茶度）との手合わせだ。それは大体が体術なのだが時に剣道だったたり斬術だったたり。お互いほぼ互角なのでなかなか勝敗がつかないのだ。

「またやっておるのかあの二人は………」

ルキアが中庭を見下ろすと一護と恋次が手合わせしているのが見えた。その近くに茶度と吉良が見守っていた。

「元気だねぇ～」
「全くまるで子供だな。食事をとったらすぐ運動とは」
「健康的だねぇ～」
「………井上。顔が赤いぞ」
「えぇっ？！」
「まぁ井上が一護を見るときはいつも赤いか」
「ふわぁ………」

必死に手で扇ぐがさらに赤くなっている。

（井上は正直だな………比べて私は）

少しでもそんな素振りを見せようものなら『何か』を壊してしまいそうで怖いのだ。

顔の向きはそのままに、一護を見つめる織姫の横顔を盗み見る。目鼻立ちが整った顔はくるくると表情を変え、薄赤い頬も愛らしく。自分の意見はしっかりと持っていて時には頑固な一面さえもあるが気になる程ではない。たまに空想（妄想？）の世界に行ってしまうときもあるがそれだって微笑ましい。つまり、羨ましいのだ。自分の気持ちを素直に言えることが。

（むしろ尊敬………かな）

また一護と恋次の手合わせ（じゃれあい）に目を戻した。

一瞬、恋次と目が合った気がした。

「おいルキア！」

放課後、ばらばらと散っていく生徒達の中で呼び止められた。

「恋次か。なんだ？」
「おめー昼休みん時、辛気くせー顔で見てただろ」
「な………」

やはりあのとき一瞬だったが気づいていたのだった。

「まぁたくっだらねーことで悩んでたんだろ」
「な！………く、下らなくなどないっ」

(貴様のことで悩んでいたなど言えるわけがないがなっ)

ついでに心の中で吐き捨てる。こういうところが、可愛くないのだろう。

「へーへーそうかよ。ったく、こっちは心配してやったのによ」
「恩着せがましいことを」
「あ？」
「貴様に心配されずとも私は平気だ」

「…………」

ルキアは心底芯の奥でため息をついた。これでまた喧嘩になる。こんな自分に吐き気がした。

「ったく…………うじうじ妙なこと考えて結論しやがったな」

「は？」

恋次の呟きはあまりにも小さかったため、正面にいるルキアにでさえ聞こえることはなかった。

「あのな、言っとくがおめーは無駄に考えすぎなんだよ。お前は考えるより行動派なんだ。意外とな」

「…………はぁ？」

わけがわからなくて首をかしげる。そこで初めて恋次の後ろ十ｍぐらいあとに一護と吉良と茶度がこちらを見ているのに気づいた。恋次を待っているのかと思いきや、一護はニヤニヤしているし吉良や茶度も苦笑している。何なのだろうとまた恋次に視線を戻す。

頭を抱えていた。

（…………同類か）

類は友を呼ぶとも言う。似た者同士で長く幼少を過ごしていたのだ。

「恋次」

ちょっとだけ頬を赤くした恋次が頭をあげた。

「お互い様だ、私たちは。つまりお前は一人で考える前に相談しろと言いたいのだろう？」
「ま……そうだ」
「大丈夫だよ、恋次」

今一番の悩み事の相談は出来ないが。

「なら、いい」
「そうか。ではまた明日な」
「おーぅ」

一護達のもとへ去っていく後ろ姿をみてルキアは微笑んだ。

「くーちきさんっ」
「いっ井上？」

実は織姫も気配を消してこっそりと見ていたのだ。

「よかったね！」

ニコニコと嬉しそうに笑うのを見て、思い知った。

（案外自分もわかりやすかったか………）

その7

声が聞こえる
名を、呼ぶ、声
オマエ誰だ

いや――――俺は知ってる

オマエは

「一護テメェとっとと起きやがれ！」
「………起きてる」
「体が寝てりゃー寝てるうちにはいんだよっ」
「むちゃくちゃな理屈押しつけんな。うるせぇほっとけさっさといけ」
「ったく起こしてやったたっつーのに。つーか四年たっても寝起きがわりぃなんて………」

ぶつぶつと文句を垂れながら恋次は乱暴に扉を開いて朝食へと向かった。
ゴロリと寝返りをひとつうってから気だるげに起きあがる。一護はここのところとみに眠れていなかった。不思議な夢を見ていたからだ。暗がりの中、目を閉じていると（この夢の中では眠っているわけではない）声がするのだ。聞いたことあるようなないような、知っているような知らないような。声の持ち主も憂いているような嬉しそうな。

あの声は誰だろうか

――――――――

「くわぁ………」

「黒崎君、眠いのかい？」

別の日の昼食時、いつものメンバーでとっていると一護の大あくびに呆然としていた。
しかし一護とて見せたくて見せているわけではない。わけがわからない夢に悩ませているのだから。しかも一昨日ぐらいから暗がりが九十度傾いた現世のビル郡に立っていたのだ。

「ちょっと……夢見が悪くてな」
「どんな夢なの？」

織姫と雛森、ルキアが夢占いという本を囲んでキラキラとした目を一護に向ける。

(女ってホント、占い好きだよな………；)

とはいえ占いというのはれっきとした統計学だ。しかしそれもピンキリでもある。
ものはためしで夢の内容を話した。

「えぇっと………『周りの風景はあなたの深層世界です』だって」
「九十度傾いてんだろ？ひねくれてるんじゃねーか？」
「こんのやろぉ………」

恋次やルキアは大爆笑だ。

「それから、『【声】はあなたの内なる【声】であり【心】です』」
「内なる心――――」

死神にとっての内なる心は重要になる。それは、自身のもう一つの魂………つまり斬魄刀の魂を意味する。

「それなら一護が知ってるっつーのは頷けるよな」

何せ自分の分身なのだから。

オマエは、俺か――――

「となると、だ」

ハッと恋次の声で我に返った。

「卒業とともに席官入りは間違いねぇな」

院生で己の刀の名前を知るものは少ない。そもそも刀の名を知るということは己の心（しん）を知るということ。だから最初は『浅打（あさうち）』という意思なき刀なのだ。浅くしか心を打つ覚悟しかないという、裏の解釈もあるほど。

「んなこたねぇよ。まだ知らないんだからな」

そう言って食事を口に運ぶ。そんな姿を見ながら静かに笑った。

一護が好かれるとこはこういうところだ

自慢するでもなく、卑下するでもなく、ただ淡々と事実を述べ受け止めて前に進もうとする。真面目であり真っ直ぐで、でもそれだけじゃない。恋次と喧嘩したりチャドと一緒になって現世の音楽に興味もったり吉良の恋をけしかけたり。いたって普通の青年だ。
まぁ一護にしてみたらこの場にいる連中は自分も含めて似たり寄ったりな性格してるなぁと思っているのだが。

その8

現世での実技演習が始まった。実際に現世へ赴き魂葬をする実技だ。これには最上学年の三名が付いての実習だ。整の魂葬だから危険がないからである。

「結構楽だな」

一護達四人の背後では他の生徒に魂葬された霊が悲鳴をあげながら消えていく。強く押しすぎると痛みを伴うのだ。
今回、一人辺りのノルマは三人。早々に終わってしまって暇をもて余していた。

「もうすぐ採用予選試験だな」
「とっとと受かって部屋ちゃんと持ちたいぜ」

恋次の家はもはや霊術院の一護との二人部屋だ。一護がいない時は悠々自適なものだが、プライベートが保たれていることはあんまりない。持ち込めるものも限られているし、何かを増やすと置く場所は狭い。

「隊長や副隊長クラスになると隊舎の中に結構大きい家屋が貰えるらしいよ」
「まじか、雛森!?………あーでもでけぇ家に一人ってのはなぁ」
「掃除が面倒だよな」
「「………」」
「一護………オメー時々すっげー庶民的っつーか家庭的になるよな」
「はぁ？」

ワイワイとくっちゃべっている間に、まだノルマが残っていた者も終わり、院に戻るときがやってきた。

「これで演習は終了だ。今から霊術院に戻る。忘れ物はないか？地獄蝶は……」
「おい、一護。知ってっか？」
「ぁん？何をだよ」
「真ん中で喋ってる人だよ」

左ほほに【６９】と刺青を彫っている男は始めからずっと堂々と話していた。のだが、

「知らねぇな」
「だろーと思ったぜ。相っ変わらず名前と顔を覚えねぇな」
「上級生だろ」
「馬っ鹿。あの人はなぁ、一回くらい名前聞いたことあるだろ、檜佐木修兵！卒業と同時に席官入りが決まってる秀才だよ！」
「ふーん、すげぇな」
「しかもどこの隊も引っ張りだこらしいぜ」
「へぇ」

ちなみにひそひそ声で話している。他のクラスメイトも檜佐木について噂や憶測が飛び交っている。

「なんだよ……反応薄いな」
「黒崎くん、眠いんでしょ？」

クスクスと雛森が笑いながら会話に加わってきた。吉良はそれだけで顔が赤くなるのだが、雛森は気づかない。

「まぁな」
「ガキ」
「うるせぇ………今日は妙にねみーんだよ」
そう言って一護は大きなアクビをかみ殺した。

「地獄蝶は逃がすなよ。迷っちまうからな」
ぞろぞろと一人、また一人と向こうへ帰っていく。
「戻ってまた一旦集まったら解散だから、黒崎君。もうすぐだから早く移動しよう」
「なんでこんなに眠いんだ………」
「ったく。ほら、とっとと戻んぞ」
今まさに扉をくぐろうとしたとき――――

オオオオオォォォオオッ

「うわあぁっ?!」
「きゃあぁぁ!!」

巨大虚が五体、襲いかかってきた。
「逃げろっ！」
檜佐木が鋭く叫ぶ。残っていた生徒は押し合い圧し合い出口へと殺到する。その間に女性の上級生が腹にひとつきされ、投げ捨てられた。
「蟹江！――――くそおぉっ！！！」
「待て！」
もう一人の男子上級生が我を忘れ突っ込んでいくが、雲泥の差であっけなく真っ二つ。
「くそっ！なんでこいつら………霊圧が無いんだ！？」
さすが席官入りが決まっているだけあって、なんとか攻撃を弾き避けている。だがしかしそれも時間の問題である。なにせ虚は五体なのだから。
その内の一体が最後列にいた一護たちに襲いかかった。

ザシュッ

「ぐ………っ！」
「先輩！」
「俺のことはいいから早く行け！」
右目辺りから鮮血を流しつつも懸命に下級生を守ろうと必死だ。そ

してなんとか向こうへ救援を求める。その隙に虚が檜佐木へ――――

がききっ

「な………」

檜佐木に襲いかかろうとしていた虚の長い爪を、恋次と吉良で食い止めていた。

「逃げるのは性に合わないんスよ」
「微力ながらも救援までは持たせます」

二人合わせてまた甲高い音を出して長い爪を引っ込めさせた。その間に詠唱を済ませた雛森の鬼道による攻撃。
しかしそれは全くダメージを与えることはなかった。

四人に死が迫る――――

その頃一護は、
立っていられないほどの眠気に襲われていた。自分も仲間とともに、せめて救援がやってくるまではと思っていたのに、身体が言うことを聞かない。こんなことをしている間にも仲間に危険が迫る。
(動け、動けよっ!!戦うんだ、仲間を死なせるのかよっ!)

――――逃げることは許さない
(オマエは………)
――――戦いに臆するな、前を向け

（ずっと……呼んでいた）

――退けば老いるぞ、止まれば死ぬぞ

呼べ

我が名は――

「斬月!!!」

一護が叫び刀を横に一閃すると、青白い剣圧が放たれ、恋次たち四人に襲いかかろうとした虚二体を消し去った。

「一護…………」

「黒崎君っ」

身の丈ほどで柄も唾もない大剣。

振り切った体制のまま、一護は崩れ落ちた。

「射殺せ　【神槍】」

「あ………」

五番隊の藍染隊長に

市丸副隊長――――」

藍染は優しく笑いかけると雛森の頭を撫でた。

「怖かっただろう。頑張ったね。後は私たちに任せなさい」

よりいっそう、微笑んだ。

「凄かったね」
「うん………」
よく晴れた空の下。四人並んで歩いていく。
「早くあんな風になりたいね」
「………あぁ」
しみじみとする三人に対して、

「そんなにスゲェんなら、見たかったなぁ………」

一護は一人、ごちたのだった。

その8（後書き）

あのストーリーが入っている巻はないのでうろ覚えでなんとかかんとか（汗）

うーわー間違ってたらどーしよ～

その9

卒業が近づいていた。七人各々、試験に合格し晴れて護挺十三隊へ、配属が決まった。

「一護とルキアは十三番隊か」
「恋次と雛森は五番隊」
「姫ちゃんと吉良くんが四番隊で」
「茶度君が十一番隊だったね」

最後の夜。明日は卒業式が終了とともにそれぞれ配属された隊の宿舎へと向かい、そのまま隊長からの対面式だ。それが終われば先輩隊士指導のもと、仕事が始まる。この先ずっと、こうやって全員集まってゆったりと過ごすことは限りなく少なくなるだろう。だから、この日だけは思い思いに過ごすことができる。

「ドキドキしちゃうねっ」
「そっ、そうだね………」

雛森が受かれるのも致し方ない。なにせ憧れであった五番隊隊長である藍染の元に配属されたのだから。織姫も一番得意な治癒・救護の隊に配属されて嬉しいのだが………

(なかなか、会えなくなるんだよね………)

偶然隣に座ることが出来た(茶度とルキアが細工したのだが)一護を盗み見る。まだ、想いを告げていない。
卒業が決まってからずっといつ言おうか、それよりも言った方がいいのか、もし言って振られたらまた前のように接することが出来る

のか、いや彼が自分を振ったことで傷つきやしないか……なんてことでズルズルとここまできてしまった。たつきに相談したくとも、すぐに出来る距離も時間もなくなってしまった。雛森は、織姫が一護を好いていることに気づいていないから相談しにくく、ルキアもルキアで以前に話を振ったら織姫以上に動揺するわけで、こちらもしにくく。

「そういやぁ、一護。お前ん家の双子、今度入学すんだっけか？」
「いや、片方だけだ」
「え？」

女性陣は初耳だ。一護に双子の妹がいることは聞いていたが。

「へぇ〜！やっぱりお兄ちゃんの影響なのかな？」
「さぁ。けどまー少なからず受けてんのかもな」
「だよねぇ。あっそうそう、あたしの弟みたいな子も今年入学するんだよ！おばあちゃんのお手紙がついさっき届いてね、書いてあったの」
「じゃー同級生になるわけだ」
「そうだね〜」

こうしてそれぞれ期待や不安を抱え、

一夜が明けた。

一護達は無事に初日を終えた。次の日からは忙殺の日々が続く。元々瀞霊挺内に自宅がある者は久方ぶりに戻り、ない者は隊舎の割り当てられた部屋にて荷ほどきを始める。

そして今現在、席官入りを果たしているのは一護と恋次だけである。護挺十三隊はあくまで能力重視であり、特に霊力と物理的な力が強ければ強いほど上にいくのだ。

さて、実家に戻った一護はというと。

「浦原さん……俺より家に馴染んでねぇか？」
「いやいや、そんなことないっスよ～」

食卓には家族＋一人と一匹……

「――って夜一さん？！」
「なんじゃ。せっかくお主の卒業祝いに来てやったというのに」
「いやなんで猫姿……」
「やいのやいのうるせぇな。とっとと宴会始めんぞ～！」
「宴会かよ！」

主役そっちのけで騒ぎ始める一心。それに乗っかる母と遊子、そして浦原と夜一。

「ドンマイ、一兄」
「夏梨……」

ここ数年で性格がガラリと変わった妹。泣き虫で、でもよく笑っていた夏梨は今や泣かないし笑いはするが、静かに笑うようになった。というのも母が言うには、一護がいないことをいいことに、近所に住む悪ガキが何かしたらしい。その何かは、わからない。子供同士の話だ。いつまでも親が付きっきりというわけにもいかない。

「……そういや、入学おめでとさん」
「一兄も卒業おめでと。まぁ座んなよ」
少人数であるのに後ろはガヤガヤ騒がしい。というか人数が合わない気がする。振り向けば、
「増えてやがる………」
「いつものこったぁね」
夏梨はとりあえず料理がなくならない内に食べる分だけ確保して離れる。一護も自分の飲む酒と夏梨のジュースを持って後に続く。
「あれ、一兄お酒飲むの？」
「これから増えっからな」
とはいえ黒崎家は幼少から酒に馴れさせられているのと、遺伝で結構強い。
「お前らが別々になんのって、初めてじゃねぇか？」
「………遊子も受けたよ。でも、落ちた」
「え？」
「夜一さんに教えてもらったけど、あの試験って精神判定も加わってるんだって。無意識下に視覚によって問いかけるらしいよ。虚を躊躇わずに斬れるかどうか」
「………」
「ハッキリとは言ってくれなかったから嘘かもしれない。でも、あたしはよかったって思う。遊子は優しい子だから、知能が高い虚に同情しちゃって騙されちゃう」
「お前は………」
「最近、霊圧の制御がうまくいかないんだ。夜一さんに稽古つけて

もらってるけどなかなか上達しなくって。夜一さんが言うには心身を鍛えるのが一番いいっていうから」

「……そうか」

夏梨も遊子も、一護が霊術院に入った年齢ぐらいに達していた。外見は現世で言うと十歳ぐらいなのだが。

「そういやぁ、俺の友人の弟が入るんだと」

「外の子？」

外、というのは勿論、流魂街のことである。

「おう。名前は……えーっと」

「また忘れたの」

「イメージはあるんだよっ」

「けど、結局覚えてないんでしょ」

「ぐっ――あぁ、そうだ、動物！」

「はぁ？」

「強そうな動物の名前が入ってた気がする」

「ふぅん」

「……ふぅん、て」

「あてにならない」

「テメッそーいうこと言うやつはこうだ！」

「なに――って、うわぁっ？！」

夏梨の腰を掴んで持ち上げた。いわゆる、高い高いだ。それなりの年頃になれば、恥ずかしいものであるが、

「あっ夏梨ちゃんずるぅ～い！お兄ちゃん、あたしもやって！！」

「ばっ！あぶねっ！飛びつくな遊子っ」

「落ちるよ一兄！」

久しぶりにぎゃんぎゃん騒ぎ暴れる子供たちに、周りは大いに笑い合い、夜は更けていった――――

その１０（前書き）

「おい、見ろよあの髪」

だからなんだ

「あの目も………本当に人間か？」

うるせぇ

五月蝿いのに変わりねぇな
流魂街（あそこ）も、霊術院（ここ）も――――

その１０

「君が日番谷冬獅郎かい？」

ざわめき鬱陶しく廊下に出たが、変わらず話の的になっている少年に一人の青年が話しかけてきた。

「……………そうだが」

「そうか！あぁ、俺は草冠宗次郎。首席は誰だろうなんて思ってね。君だったんだな」

青年―――――草冠は始終にこやかに右手を日番谷に差し出した。

「君とはいい友達兼ライバルになれそうだ。宜しく」

「あぁ」

草冠はあくまでも能力のみ日番谷を見ている。それに好感を抱き、同じように手を差し出し、握りあった。

日番谷は草冠と話が盛り上がってきた頃、他のグループの会話が聞こえてきた。

「おい、知ってるか？あの『黒崎家』の人間がまた入ったんだってよ！」

「長男は今年卒業したから………妹達か？」

お互い流魂街出身の二人は『〇〇家』と言われてもなんのことかわからない。

「貴族…………なんだろうな」
「しかも女の子みたいだ」

ぽそぽそと話していたら、件のグループが二人の前に立ちはだかった。

「なんだ、お前ら流魂街出身か」
「じゃあ、黒崎家なんて知らねぇよなぁ」
「だからなんだよ。ここに入ったなら、身分なんか関係ねぇだろ」
「そうだよ、あくまでも実力がモノをいう世界なんだから」

グループの後ろから凛とした幼い少女の声が響いた。

「…………なんだ。入ったのって、お前の方か」
「入ったのがお前じゃあなぁ。ガッカリだ」
「本当、よかった。アンタらの本性が知れて。やっぱり質悪かったな」
「てめぇ！」
「ま、どんなに更正してもあたしゃ兄貴、特に親父が黙ってないからね」
「…………没落貴族が生意気に。友人は選んだ方がいいぞ」
「頭悪いな」
「なにぃっ！？」
「ここでは身分なんか関係ないって言ったじゃん。だからあたしはアンタらと友達になんかなりたくもないし、知り合いとも思われたくないね」

そう吐き捨てると少女はスタスタ歩いて一組の教室へ入ってしまった。そしてグループは呆然とする日番谷と草冠の存在を忘れたのかいきりたち乱暴に二組へと戻っていったのだった。

二人が教室に戻ると今度はあの少女の話題へと変わっていた。

『没落貴族』だの『変人貴族』だの

それでも最後には『昔から隊長格の死神を輩出している名門家』がつく。

「そうだよ」

と、少女――――夏梨は言った。

「んーでも没落、なのかなぁ。貴族の称号を与えられる前から使用人なんていないよ。自分で出来ることは自分でやる、ってのが家訓だからね。婚姻も自分が好きになって相手も好きだって言ってくれる人と結婚、だし恋愛も自由だから。こーいうところが、貴族としては変に写るんじゃない？隊長格を輩出してるったって、家系的に霊圧が物凄く高いか、平均より低いか、両極端でさ。それに死神業に興味なかったら別にやらなくてもいいし。記録ではそんなに死神やってた先祖はいないよ。割合の問題なだけだね」

あっけらかんと言い放つ夏梨は貴族としての格式張った立ち振舞い

をするどころか、粗野な動作や口調で、確かに貴族としては変になるのだろう。けれどもここでは身分は関係ないのだ。
すぐに三人は仲良くなった。

「おーい、日番谷！」

人混みを掻き分けて草冠が近づいてくる。

「夏梨もいたのか」
「いちゃ悪い？」
「まっ、まさか！…………あぁ、見れないのか」

「「うるさい」」

今日は中間試験の結果発表日だ。掲示板にずらずらと名前が書かれているのだが、日番谷と夏梨は背が小さすぎて見れないのだ。

「えぇと、日番谷が一番だったよ。で、夏梨と俺が二番」
「そうか」
「せっかく一番取ったんだからもっと嬉しそうにしろよ！」
「……………見えないか」
「見えないね！くっそー笑えっ」
「わっバカ！なにしやがるっ」

夏梨が日番谷の脇をくすぐろうとするのだが、されまいと日番谷は逃げる。それはは日にた目に見たら子猫のじゃれあいにも見えて、微笑ましい。草冠も苦笑した。

その１１

「お」
「あ」

バッタリ道端で織姫と一護は出くわした。かれこれ一月ぶりである。なにせ四番隊と十三番隊は遠い。さらに、一護は十番台の席次にいた。それゆえに色々と忙しかったのだ。

（凄いなぁ………）

他のメンバーも力をつけてそれなりに責任のある仕事を任されたりしている。かくいう織姫も特異な能力はとても重宝されているし、仕事をこなすのも早い。

「久しぶりだな」
「えっあっうんっそうだねっ！元気そうでなによりです」

元気なのは知っていた。なにせ四番隊は全死神の健康状態が入ってくるのだから。

「えぇと、黒崎くんは………これから任務かな？」
「いや、帰ってきたとこだ」
「そっか、お帰りなさい」
「お、おう………」

（なんか新しいな………）

初めて家族以外でお帰りと言われたのは初めてで、なんとなく照れ

くさくなってしまう一護だった。

一方その頃の夏梨は、

(珍しい………乱れてる)

眠気覚ましに兄の霊圧を探っていたら、何かに動揺していることに気がついた。

(近くに誰かいる………?)

「黒崎!」

「はいっ」
「そういうことは休み時間にやれ」
「すいません……」
慌てて授業に戻るのだった。

「さっき、何してたんだ？」
草冠が真っ先に夏梨の席へと近づく。その後ろからは日番谷が呆れた顔で近づいてきた。日番谷はもうわかっている。
「さっき、ちょっと眠くてさ。眠気覚ましに一兄……兄貴の霊圧を探ってただけ」
慣れ親しんだ霊圧は簡単に見つかった。ここからほど遠い所に、優しい霊圧をした人と一緒に。
なんとなく女性のような気がして、なんとなく寂しい思いをしたのは秘密だ。
「へぇ？」
草冠は若干訝しげになったものの、別の話題に話を変えたのだった。

「あっという間に夏休みだなぁ」

草冠が空を見上げると同じく、日番谷と夏梨も見上げた。
空は真っ青。陽射しも強く、暑い。

「日番谷と夏梨は実家に戻るんだっけか？」
「うん。宗次郎は残るんだっけ」
「あぁ。少しでも貯めておかないとな」

草冠に家族はいない。いたにはいたのだが、次の生へと旅立ってしまったのだ。

「………早く会いたいなぁ」

ポツリと呟いたのに、二人には届いていたようだ。

「こんだけ長い休みならさ、ちょっとくらい一兄の休みとかぶるだろーじゃん？手合わせしてくんないかなぁって」

「あぁ………」

納得したような、しないような。

「黒崎さん、ちょっといいー？」

「あ、うん。なにー？」

離れたところで話をしていた女性徒に呼ばれて、夏梨は席を外した。そのままおしゃべりに興じる。夏梨とて、いくら日番谷や草冠と一番仲がいいといえど、同性の友達だっている。たとえ名字呼びでも。夏梨が席を外す時、二人は外に出ることにしている。とはいえ今日の授業は全て終了し、後は寮に戻るだけ。二人は同室であるから、ゆっくりと話すならば寮が気楽なのだ。

「なあ、日番谷」

すでに出された課題を少しでも片付けておこうという話になって机に向かったのだが、草冠に呼び止められた。

「俺、強く、早く死神になりたいんだ」

「………頑張ればいいことだろう？」

「ああ。だから、お前にまずは、勝たないとな」

草冠の瞳はキラキラしていて、未来に期待しているようだった。

「色々と、な」

最後は小さすぎて、聞こえることはなかった。

その１２

「夏梨ちゃーんっ！」

この暑い中、遊子は待っていたようだ。（現世の）帽子を被っているものの、汗が一筋どころか、たくさん。

「ん、ただいま。早く入って汗流そう？」

熱中症・脱水症になったら、シャレにならない。
今までは、迎える側だった。これから先、いつまで彼女のお出迎えがあるのだろうか。なんとなく【女】という感じがするのは、恋人ができたからであろう。

「アイツは、どう？」

遊子から知らされたのは約一ヶ月前の手紙で。今のところ他では母しか知らないらしい。一心と一護はとかく娘・妹に甘い。一護は驚きはするだろうが、騒ぎ立てるとかまでいかないが。問題は父親である。恋人が出来たなんて言ったあかつきにはその相手の家に怒鳴り込みに行ってもおかしくない。それか、娘に泣きつくだろう。でも最終的には認めてくれはするだろうけど、そこに至るまでの過程がめんどくさい。

「見た目的には、前とあんまり変わんないかな。でも接触は増えたかも」
「ふぅん。それだけなら、いいけど。泣かされたら知らせなよ。すぐ飛んで帰るからね」
「そんなこと言ったら、すぐ嘘ついちゃうよ」

まだまだ遊子にとって、ジン太より上らしい。

かくいう夏梨はまだまだ色恋沙汰に興味がなく。すっかり店の看板娘になった遊子を見送って一人、宿題を片づける。今日は一護が遠征先から帰ってきてそのまま明日は休みで。兄には申し訳ないが、稽古をつけてほしいのだ。

「！」

霊術院に入ってから、夏梨はさらに霊圧探知が上達した。学年では、

日番谷にだって負けないくらい。

「帰ってきた！」

忙しなく玄関へ駆け寄った。

一護が開けるより前に引き戸を開けた。そしてお互いに固まる。

「…………ただいま」

「…………誰、その人？」

一護の一歩、後ろにいたのはいつか感じた優しい霊圧をした人だった。

「母さんは？」

「えぇっと………親父と一緒に近所の回診してる。もうすぐ戻ってくるはずだよ」

どうやら『彼女』の紹介ではないようだ。それならば両親がどこにいるかを聞くはず。

「ならいい。ほら井上、いい加減あきらめろ」

「だって本当に悪いもの………」

並々ならぬ事情があるようだ。なにせ井上という女性の顔色が悪い。

「お姉さん、早くあがってよ。顔色悪いよ」

「ほら、な？」

「…………ハイ」

夏梨のさらなる追い討ちによって井上はやっと諦めた。

よもや、好きな人のお家にお世話になるなんて

その１３

両親と妹は慌てて帰ってきた。一大事と思っているようだが、そこまで危険性のある重大なことではないんじゃないか？
まぁとにかく最初から話さないとどうしてこんな状況になったのかわからない。

「今日、隊長の薬を受けとるために四番隊に行ったんだよ」

四番隊はいつも忙しない。というのも小さな怪我から風邪まで、すべてをここで扱っているからだ。それゆえ、特に多いのが厳しい訓練・任務で有名な二番隊や修行に特訓・死合で凶暴な十一番隊や不可思議・命の危険性がある十二番隊だ。
織姫は入隊してからすぐ、その治癒の早さに二番隊と十一番隊に目をつけられ（十二番隊はなるべく遅く治したい）、しかも断りきれない性格ゆえに日がな一日霊力を使っていた。さらに近年の、夏の暑さによって夏バテしてしまったのだ。

「井上の霊圧は、普通の死神と若干違うから食事改善も難しいんじゃないかっつーことで卯ノ花隊長に頼まれたんだよ」

こういう診療所の方が気がねしないのでは、というのも一護は感じ取っていた。職場で看病してもらうのは、恥ずかしいだろう。色々な意味で。

「そりゃあ災難だったな」
「それじゃあ早速なんとかしましょう。とりあえず、遊子と夏梨は客間に案内してちょうだい」
「「はーい」」

展開の早さについていけない織姫を二人は背を押して部屋を出ていく。

「さて、と。一護？まだ何かあるでしょう」
「卯ノ花隊長から文を預かってきた」
「だろうな」

いくら平隊士といえど、こんな状況に至らしめたのは隊長である卯ノ花の責任である。それの後始末的なことを他隊の、しかも家族にやらせるというわけで。

「烈さんも大変ね」
「特に十一番隊は厄介な連中ばっかだからなぁ。気苦労が絶えねぇよな」

上等な紙の文には依頼と謝罪がしたためられていた。

（っつーか、相変わらず交友関係広いなこの夫婦）

その謎は未だに計り知れない。

「「…………」」

織姫と夏梨の間には沈黙が降りていた。遊子がいれば、色々と会話（というか質問）が弾むのだろうが。その遊子は客用の布団を取りに行っている。

「えぇと」
「えっと、………夏梨ちゃん、でいいのかな？」

とりあえず何か話さないと、と口を開いたが先に織姫が話をふる。

「あ、そうです」
「今年、霊術院に入学したんだよね」
「はい」
「黒崎くんから聞いてね、どんな子かなぁって思ってたんだ。やっぱりそっくりね」
「………似てますか？」

外見では遊子の方が似ている。かくいう夏梨は二人とは正反対だか

ら、初対面で一護と似ていると言われたのは初めてである。

「とっても。内面的な意思の強さがそっくり。眼差しがとても真っ直ぐだから………って、なんかえらそうに言っちゃってごめんなさい」

「いいえ！　そんなことないです」

この人はよくヒトを見る人なんだ、と思うと同時に嬉しさがこみあがる。てっきり似ているのは粗野な行動と口調だけかと思っていたのだ。

「あれ、何の話してるの？」

遊子が来る頃には大分打ち解けていた。

「ねぇねぇ夏梨ちゃん？」
「なにー？」

その晩のこと。しっかり翌日は一護に稽古をつけてもらう約束を取り付けた夏梨は明日の分の課題を片付けるために机に向かっていた。こういうことがあるだろうからと、今年から遊子と部屋を別にわけて貰ったのだが、一緒に寝たいからと布団をわざわざ持ってきて夏梨が入るのを待っている。

「気づいた？」
「主語」
「もうっ織姫さんのことだよ！」
「あぁ………」

やや上の空だった意識を現実に戻す。課題を見返してみるとキリのいいところまで終わった。これならもう布団にはいってもいいだろう。
卓上の灯りを消して並べられた布団にもぐり込む。

「で、気づいた？」
「織姫さんは、一兄のこと好きみたいだね」
「みたい、じゃなくて好きなんだよ！」
ハッキリ見なくてもわかる。きっと瞳をキラキラさせているのだろうと。

「随分と嬉しそうだけど」
「あんな美人さんに好かれるお兄ちゃんなんだって、再認識したの♪」
「あっそ……；」
昔は兄が理想の彼氏だなんだと言っていた遊子が、違うタイプの男と付き合うようになって、もう恋に恋するような発言ではなくなったようだ。相変わらず件（くだん）の彼氏（ジン太）より兄の方にベクトルは傾いている気もするが。
「お兄ちゃんはまだお友達感覚だけど、お似合いだと思うの！」
「ふぅん」
「夏梨は好きじゃないの……？」
「好きだよ」
疲れない程度におしゃべりに興じて感じたこと。織姫の知識は多岐にわたり、瀞霊廷の変わった史実に夏梨は興味を引いたし、簡単な材料で作るお菓子の作り方などになると、どこから出したのか遊子は手帳に記録していった。しかし時折妄想の世界に飛んでいって奇妙な単語が発せられることがあるが、そこも可愛らしい魅力ともいえる。
「異性に対する恋だの愛だのが、わかんないだけ」
「えぇ～？霊術院にいないの？好きな人」
「特別な意味での好きな奴はいない。………ずっと仲間だよ」
「決めつけるのは駄目だと思うな」
「へ？」
「だって未来なんて誰にもわからないんだから」
「なんにせよ、興味ないの！」

それ以降、遊子が話しかけても一言も返すことはなかった。

その１４（前書き）

駆け足になってしまいましたが、これから本編にからんでいきます
映画にも沿っていけたらなと目論んでいます

その14

さてさて
休みというのは過ぎるとあっという間なものである。
久しぶりの寮に同級生達。
そして親友達。
「冬獅郎、宗次郎！」
手を上げる二人に夏梨は元気よく駆けていった。

数年後の突然の別れも知らず――――

草冠が死んだ

夏梨がその知らせを受けたのは偶然だった。

日番谷て草冠は一年もすると夏梨を置いて飛び抜けて成績が良くなっていった。（それでも夏梨とて良かったのだが）悔しくもあり、寂しくも思っていた。そんな矢先、二人一組での実習がありその二人は別枠で違う任務地へと向かった。それから全く連絡がつかなくなったとクラスに知らされて自室で待機と言い渡され、夏梨も少しは我慢していたのだがいてもたってもいられず、特に親しい講師に殴り込みもとい聞き出しに行ってのことである。

「そんな、草冠――――」

一人欠けたまま、日番谷が戻ってきた。
完全に怪我を治してからの登校。笑うことが極端になくなった。夏梨といる時でさえ小さく笑うだけ。そして常に眉間に皺をよせて、より一層勉学にも実習にも励んだ。

（あいつ、責任感が強いからな………）

だからといって腫れ物のように接するのは違うと思った夏梨は、前とあまり変わらない態度で接することにした。

やがて、卒業が近づいていた。

「冬獅郎は九番隊の席官かぁ」
「お前は十三番隊か」
「うん。………死神になったらなかなか会う機会が少なくなるけどさ、家には遊びにきなよ」
「気が向いたらな」
「そんなことといって結局来なかったじゃん」

夏梨は憤慨するが、そもそも友人だからといってそうそう軽く自宅に誘うのは気が引けるという男心に気づかないのはいささか心配である。（家族がいるとはいえ、だ）

「まぁお互い頑張ろーぜ」

「ああ」

「絶対追い付いてやるからな！」

夏梨は少年のように、大きく口を開けて笑った。

月日は流れに流れ

平成の世に至る

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2865k/

IF

2010年11月15日08時47分発行